

どこの馬の骨やら

北見医師会
JA北海道厚生連常呂厚生病院

千石 晃

紅葉の天馬街道を南に、ほぼ全骨格が掘り出された「むかわ竜」のむかわ町立穂別博物館を訪ねた。あの地震の影響で残念な状況ではあったが、鶴川ではししゃもを食べることができた。その近隣町、浦河町では郷土博物館の隣、馬事資料館に歴史的展示物に混じり馬の全身骨格が展示されていた。

北海道にはいろいろな郷土館資料館があり、ヒグマの骨格は見たが、馬の全身骨格は初めてである。

骨盤から大腿骨、脛骨、あれ、もうひとつ関節がある。走る馬を見て勝手に膝と思い、膝から下の骨は脛骨だろうと思っていたのだが、あのスマートで華奢な脚は指だった。標本では骨盤からひずめまで太い長骨は3本あった。獣医さんから見れば医者でありながら何を寝ぼけたことを、そんなことさえ知らないのかとバカにされそうだが、ホントビックリ発見であった。

踵骨が脚の途中にありカカトになっていない、踵から脚の骨がさらに伸び、それが中足骨で、爪に当たるひずめにつながっていた。言われてみればなるほど、駆ける姿はトウシューズを履いたバレリーナのイメージか。サラブレットのしなやかなジャンプ力は走るバレリーナであった。

むかわ竜発掘では、地層の中から化石を掘り出す。誰も見たことのない恐竜である。その骨がどこに当たるのか知る由も無い作業だ。ああだこうだと考えながら、どこの骨だろうか未知のジグソーパズルを解くようなものだ。

馬の骨ならわかるだろうか？ 埋まっているのが馬の骨だと分かったとしよう。先程の中足骨が出てきた。これは大腿骨、これは脛骨、ここまでは解剖実習でやったことだ。この太い骨はなんだ？

「どこの馬の骨やら 得体の知れぬヤツだ…」

北海道に来たのは、ちょうど還暦を迎えたときだった。それから一巡り、今回こうして年男として原稿が回ってきた。すっかりいい年になってしまっていた。

医者ではあるが、その前は薬剤師だった。子供の頃から化学少年だったから迷うことなく薬学部が夢だった。中学の頃には自分で納屋の隅に実験室を作り、ガラス細工しながら装置を完成していった。

最初はどきどきしながら近所の薬局で硫酸や塩酸を小分けしてもらっていたが、高校の頃にはいろいろな薬品を500gピンで買うようになっていた。

岐阜の薬学部を出ると製薬会社に入った。香川県は高松に赴任し、某三共プロパーとして徳島を回っていた。今でいうMRであるが、結構性に合っていたのか特に文句もなく仕事をしていただが、旅先でのある嵐の日、突如眼が開いた。医者になろうと。

交際中の同僚であった妻に告げ、半年後に寿退社？し、妻の被扶養者となり予備校生となった。予定より時間が掛かったが家から通える徳島大学に入ることができた。卒業後は2つほど病院をまわり早々に開業した。当院内視鏡はファイバーから電子スコープに替わる頃で、エコーも10MHzまでと最新鋭でのスタートとなった。検査データ、画像ファイリングシステムはまだ一般化していなかったが何とか組み込み、診察室にパソコンでの画像表示ができるようになった。画像にいささかこだわりができ、動画までヒトコマ分解できる画像ファイリングシステムを友人と開発し、学会で業者としてブースでのデモもした。当時Windowsのバージョンはすさまじい速さで変わり、その対応にキリキリ舞いをさせられ、あえなく撃沈撤退を余儀なくされた。

その苦い失敗とは別に、医療界に貢献した同級生を紹介したい。今では当たり前のように電カルで医学辞書を使っているが、その開発に関わったのが同級医学生であった。Wordが幅を利かす前、日本語ワープロといえば「一太郎」であり、ジャストシステム社の開発であった。本社は徳島、徳島といえば阿波踊り、阿波徳島Awa-Tokusimaから名をとりATOKが誕生したわけだ。ATOK医学辞書を使うときには思い出してほしい。開発の影に留年という尊い犠牲をささげた人がいたことを…。

中学の頃から私の傍らには、常に実験工作室が付いて回っていたが、北海道に渡った時に決別した。何をするか、しばし考えたがすぐに決まった。今、小型旋盤やフライス盤に囲まれ遊んでいる。そんな遊びの中、「胃瘻の汚れ」からシリコーンは細菌感染の巣になることを発見した。暇がありましたら読んでみてください。

HP : <http://pegtokoro.web.fc2.com/>